

# 大きな実用主義とちっほけな真理

山 本 二 三 丸

## 一

雑誌『前衛』の本年一月号は、「日本共産党第12回大会特集」と題され、昨年十一月の同大会の「報告・決議」がそこにもれなく集録されているが、そのなかでひととき異彩をはなっているものに、「日本共産党綱領の一部改正についての報告」がある。「大会七日目の十一月二十日、西沢富夫常任幹部会委員が中央委員会を代表して『日本共産党綱領の一部改正についての報告』をおこない、結語とともに採択された」という「まえがき」に示されているように、西沢委員は、まず「日本共産党綱領の一部改正案」を読みあげ、ついでその「提案理由」を説明した「日本共産党綱領の一部改正案について」という「報告」をおこなっている。この「一部改正案」なるものは、「(一)「ソ連を先頭とする」の削除、(二)「道具」を「機関」にあらためること、(三)「独裁」を「執権」にあらためること」の三項目から成っている。そのうち、(一)および(二)の二つとも、日本共産党の性格規定をとらえるうえできわめて興味ぶかい素材をなすものといえることができるが、ここでは、とくに理論的・実践的に重大な意義をもつ(三)をとりあげて簡単に検討を加えてみることにしよう。

大きな実用主義とちっほけな真理

まず(二)の「改正案」をつぎに引いてみよう。

「(三) 党綱領第四節の「労働者、農民を中心とする人民の民主連合独裁の性格をもつこの権力」、および同第五節の「労働者階級の権力、すなわちプロレタリアート独裁の確立」のうち、「独裁」を「執権」にあらためる」(「前衛」一月号、二五三ページ)。

なお参考までに「党綱領第四節」および「同第五節」の関連するパラグラフを、つぎにかかげておこう。

「党と労働者階級の指導的役割が十分に発揮されて、アメリカ帝国主義と日本独占資本に反対する強大な民族民主統一戦線が發展し、反民族的・反人民的勢力を敗北させるならば、そのうえにたつ民族民主統一戦線は革命の政府となり、わが国の独占資本を中心とする売国的反動支配をたおし、わが国からアメリカ帝国主義をおいはらって、主権を回復し、民主主義、社会主義の勢力と連帯して独立と民主主義の任務をなすとげ、独占資本の政治的経済的支配の復活を阻止し、君主制を廃止し、反動的国家機構を根本的に変革して人民共和国をつくり、**名実ともに国会を国の最高機関とする**人民の民主主義国家体制を確立する」(前出、三八二ページ、傍点およびゴシック体—山本)。

(一) 「反動的なブルジョア国家機構が根本的に変革されても、ブルジョア国会は無事に生きのこり、おまけに国の最高機関に成り上る」という、この「純粹民主主義」絶讃の文句を賞味していただきたい。ブルジョア議会制度がブルジョア国家機構の不可欠の一構成部分であり、したがってこの議会制度の廃棄こそ、人民民主主義革命および社会主義革命の不可欠の前提要件であるというレーニンの教示をひっくりかえすばかりでなく、ブルジョア国家機構そのものについて、反動的な部分と民主主義的部分との二つに分けて、前者を「根本的に変革」し、後者を「国の最高機関に仕立てる」という芸当を演じているあたりは、日共指導層が修正と改ざんの技法において世界的達成をものにしていくことのほんの一例だといつてよい。

「日本人民の真の自由と幸福は、社会主義の建設をつうじてのみ実現される。資本主義制度にもとづくいっさいの搾取からの解放、まずしさからの最後のな解放を保障するものは、労働者階級の権力、すなわちプロレタリアート執権の確立、生産手段の社会化、生産力のゆたかな発展をもたらす社会主義的な計画経済である。党は、社会主義建設を支持するすべての党派や人びとと協力

し、勤労農民および都市勤労市民、中小企業家にたいしては、その利益を尊重し、つづつ納得をつうじてかれらを社会主義社会へみちびくように努力する」(前出、三八三ページ、傍点およびゴシック体—山本)。

つぎに、「独裁」を「執権」にあらためることの「提案理由」としてどういうことが述べられているかをみてみよう。

「翻訳上の用語の適否をふくめて科学的社会主義の諸問題などを自主的創造的に研究するという第十一回党大会の決定にもとづいて、党中央委員会付属社会科学研究所は、その活動の一部分として、これまで「独裁」と訳されてきた「ディクタトゥーラ」について研究した。研究の結果は、すでに公表され、一九七一年七月の第十一回党大会第五回中央委員会総会で確認された。その要旨はつぎのとおりである。

科学的社会主義の用語としての「ディクタトゥーラ」は、もともと、古代ローマで戦争や政治危機にさいして一時的に権限を集中することがみとめられたディクタトルからでている。しかし、科学的社会主義の用語としての「ディクタトゥーラ」は、マルクス、エンゲルス、レーニンなどの文献からあきらかなように、ひとつの階級あるいは複数の階級・階層の政治支配、あるいは国家権力を示すものであって、けっして特定の個人や組織への権力の集中を意味するものではない。すなわち、「プロレタリアートのディクタトゥーラ」とか「労働者階級と農民の革命的民主主義的ディクタトゥーラ」とかいう場合の「ディクタトゥーラ」は、国家権力の階級的本質をあらわすものであって、けっして普通選挙権にもとづく議会制とか複数政党制とかを排除するものではない。ところが、これまで「ディクタトゥーラ」の訳語として使われてきた「独裁」は、日本語の一般的語感としては、「独断で決裁する」とか、「個人または一団体による独断政治」とかいう意味にとられており、社会科学の用語としての「ディクタトゥーラ」の意味を表現するものとしては適切でない。

大きな実用主義とちっぽけな真理

反動勢力は、「ディクタツラ」の本当の意味とは合致しない「独裁」という訳語を利用して、議會制民主主義とか言論・表現・出版・集会・結社の自由とか複数政党制とかいってても、結局、「党独裁」をねらっているなどと、わが党にいわれのない攻撃をくわえている。そのねらいは、いうまでもなく科学的社会主義の理論に接するにいたつていない多くの人たちに誤解をあたえることにある。

日本における唯一の科学的社会主義の党である日本共産党が、科学的社会主義の用語としての「ディクタツラ」の正しい日本語訳を、自分の責任で決定することは、きわめて当然なことである。

わが党の立場と見解が国民の多くにより正しく理解されるようにするために、第十一回党大会第五回中央委員会総会は、社会科学研究所の研究の結果にもとづいて、わが党が「プロレタリアートのディクタツラ」などの内容を表現するときには、「労働者階級の権力とか労働者階級の政治支配」などとし、訳語としては「執権」とか「執政」とかを用いることを確認した。

以上の主旨で、綱領のなかの「独裁」を「執権」と訂正することを提案する」(前出、二五五―二五六ページ、傍点およびゴシック体―山本)。

ごらんのように、西沢委員は、「マルクス、エンゲルス、レーニンなどの文献からあきらかなように」とはっきり述べている。ここで西沢委員がことさら「など」と言っているところからみれば、この三人のほかの「科学的社会主義者」の文献もよく読んであるようであるが、とくに「マルクス、エンゲルス、レーニン」の文献は正確に読んで、はっきりとその内容をとらえており、これにもとづいての解釈だと明言している。われわれは、「など」としてあげられる「科学的社会主義者」の文献など参照する必要はなく、ただカウツキーとかフルシチョフとかいった「科学的社会主義者」の文献は、彼らがいかにマルクス・レーニン主義の基本原則をねじゆがめているかを見きわめるうえでのみ読む必要

があると考えるものであるが、いずれにせよ、われわれも、西沢委員の言明にしたがって、マルクス、エンゲルスおよびレーニンの文献に則して「ディクタツラ」の内容を的確にとらえることこそ第一の要件と考えるので、とくにレーニンの説いているところを文字どおり正確に読み、その真の意味内容を確認することをまずなしてあげなければならぬ。というのは、西沢委員は、「文献からあきらかなように」と言うだけで、肝腎の「マルクス、エンゲルス、レーニン」がいたるところで明示し強調している説明はなにひとつあげようとはしていないからである。

## 二

われわれは、レーニンの「独裁」そのものについての規定をとりあげるまえに、当然のことではあるが、「プロレタリアートの独裁」ということがマルクス・レーニン主義にとって決定的な意義をもつもの、むしろその最重要な精髓をなすものだということを明示しているレーニンのつぎの教示をしっかりと把握しておくことが必要と考える。

「マルクスの学説の主要なものは階級闘争である。ひじょうにしばしば人々は、こう語り、またこう書いている。だが、これは誤っている。そして、この誤りの結果として、マルクス主義を日和見主義に歪曲し、マルクス主義をブルジョアジーにうけいられるように偽造することが、いたるところで生じている。なぜなら、階級闘争の学説は、マルクスではなく、マルクス以前に、ブルジョアジーが創造したものであって、一般的にいえば、ブルジョアジーにうけいられるものだからである。階級闘争を承認するにすぎないものは、まだマルクス主義者ではない。そういう人は、ブルジョア的な思考とブルジョア政治との枠をまだ出ていないこともありうる。マルクス主義を階級闘争の学説に

限ることは、マルクス主義を切りちぢめ、歪曲し、それをブルジョアジーにもうけいれられるものにひきさげることの意味する。階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁に拡張する人だけが、マルクス主義者である。この点に、マルクス主義者と月なみな小ブルジョア（ならびに大ブルジョア）とのもつとも深刻な相違がある。この試金石で、マルクス主義をほんとうに理解し承認しているかどうかをためさなければならぬ」（著書『国家と革命』、全集第四版、第二十五巻、三八三―三八四ページ、訳四四四―四四五ページ、傍点―レーニン、ゴシツク体―山本）。

「日和見主義は、階級闘争の承認を、まさに最重要な点までは、すなわち資本主義から共産主義への過渡期、ブルジョアジーを打倒し、彼らを完全に絶滅する時期までは、おしひろげない。現実には、その時期は、不可避的に、未曾有に激しい階級闘争の時期であり、未曾有に鋭い形をとった階級闘争の時期である。したがって、この時期の国家もまた、不可避的に新しい型の民主主義的な（プロレタリアと無産者一般にとつては）、また新しい型の独裁的な（ブルジョアジーにたいしては）国家でなければならない。

さらに、マルクスの国家学説の本質は、一階級の独裁が、あらゆる階級社会一般にだけ必要なのではなく、またブルジョアジーを打ち倒したプロレタリアートにだけ必要なのではなく、さらに、資本主義と「無階級社会」、共産主義とをへだてる歴史的時期全体にも、必要なことを理解した人によってだけ、会得された。ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうあろうとも、結局のところ、かならずブルジョアジーの独裁なのである。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数の多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避的にただひとつ、プロレタリアートの独裁であるであろう」（前出、三八四―三八五ページ、訳四四五―四五六ページ、傍点―レーニン、ゴシツク体―山本）。

では、「独裁」とは、いったい、どういうことか？ この言葉の正確な科学的規定をあますところなくあたえてい  
るのは、いうまでもなく、レーニンそのひとである。一九〇五年に著わした名著『民主主義革命における社会民主党  
の二つの戦術』のなかではやくも、レーニンは、「独裁の俗流的・ブルジョア的な説明とマルクスの独裁観」につい  
て論究し、ついで翌一九〇六年に小冊子『カデットの勝利と労働者党の任務』のなかで、「独裁」の問題をさらにく  
わしく考察している。そして、この「独裁」の問題を、日和見主義的歪曲の批判とともに全面的にとりあげ論究してい  
るのは、さきあげた周知の名著『国家と革命』（一九一七年）であり、また同じく不滅の名著『プロレタリア革命と  
背教者カウツキー』（一九一八年）である。この二著は、「国家と革命」の問題および「プロレタリアートの独裁」  
の問題を詳細に、かつ首尾一貫して、すこしの曖昧な点も残さず、全面的に、明確に論究したものととして、きわめ  
て貴重な、もっとも基本的な文献である。しかし、この二著の発表のあとでも、「プロレタリアートの独裁」につい  
ての日和見主義的修正および歪曲はいぜんとして横行し、この決定的に重大な問題の意義もあいまいにされ無視され  
る傾向が根強くはびこっているという事態にかんがみて、レーニンは、この問題を最後まで、徹底的に論究し、日和  
見主義的歪曲および修正をマルクス主義の陣営から一掃するために、何度も何度もこの問題を取りあげ、この問題の  
決定的意義を極力強調するとともに、その内容を全面的に論究し、あらゆる角度から日和見主義的歪曲および修正を  
執拗に追求している。いま、それらの論究のなかで、主だったものだけでもあげれば、つぎのとおりである。

『民主主義』と独裁について』（一九一八年十二月）。

『第三インターナショナルとその歴史上の地位』（一九一九年四月）。

『校外教育第一回全ロシア大会』（一九一九年五月）における『自由と平等の、スローガンによる人民の欺瞞について』

の演説。

『偉大な創意（統後の労働者の英雄主義について。「共產主義土曜労働」について）』（一九一九年七月）。

『国家について』（一九一九年七月、スヴェルドロフ大学での講義）。

『第三インタナショナルの任務について』<sup>(2)</sup>（一九一九年八月）。

『プロレタリアートの独裁について』（一九一九年九月）。

『プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治』（一九一九年十月）。

『憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁』（一九一九年十二月）。

『政論家の覚え書』（一九二〇年二月）。

『共產主義内の「左翼主義」小児病』（一九二〇年六月）。

『共產主義インタナショナル第二回大会の基本的任務についてのテーゼ』（一九二〇年七月）。

『独裁の問題の歴史によせて（覚え書）』（一九二〇年十月）。

(2) ここでは、参考までに、この論文の最後の第「六」節からの抜粋をつきにかけておこう。

「ベルン・インタナショナルについてもっとも危険なことは、プロレタリアートの独裁を口さきで承認していることである。この連中は、自分が労働運動の指導部にとどまってさえいられば、どんなことでも承認し、どんなことにも賛成する用意がある。カウツキーは、いまではすでに、自分はプロレタリアートの独裁に反対しない、と言っている！ フランスの社会排外主義者と「中央派」は、プロレタリアートの独裁に賛成する決議に署名している！

彼らは、なんの信頼にもあたない。

必要なことは、口さきの承認ではなくて、改良主義の政策と、ブルジョアの自由やブルジョア民主主義の偏見と、実際に完

全に絶縁することであり、革命的階級闘争の政策を実際におこなうことである。

彼らは、プロレタリアートの独裁とならんで、「多数者の意志」や「一般投票」「普通選挙権」や（まさにカウツキーがやっているように）ブルジョア議会制度をもちこむために、ブルジョア国家機構全体を完全に破壊し徹底的に破砕することを拒否するために、プロレタリアートの独裁を口さきで承認しようと試みている。改良主義のこの新しいごまかし、新しい抜け穴にたいしては、なによりもはげしくたたかわなければならない。

もし住民の大多数がプロレタリアと半プロレタリアから成っていないとすれば、プロレタリアートの独裁は不可能であろう。カウツキー一派はこの真理を偽造して、プロレタリアートの独裁を「正しい」とみとめるためには「多数者の投票」が必要であるかのように言っている。

こっけいなペダントよ！ブルジョア議会制度の枠内での、その諸施設内での、その慣習のなかでの投票は、プロレタリアートの独裁を実現するために、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義に移行するために上から下まで粉砕されなければならないそのブルジョア国家機構の一部分であるということが、彼らには理解できなかった。

歴史がプロレタリアートの独裁を日程にのぼせているときには、すべて真剣な政治問題は、一般に投票によってではなく、内乱によって解決されるということが、彼らには理解できなかった。

プロレタリアートの独裁とは、新しい国家組織の全機構を自己の手中に掌握し、ブルジョアジーを打ちやぶり、小ブルジョアジー、農民、小市民、インテリゲンツィア全体を中立化する一階級の権力だということが、理解できなかった。

階級があるあいだは、自由や諸階級の平等は、ブルジョア的な欺瞞である。プロレタリアートは権力を掌握し、支配階級となり、ブルジョア議会制度とブルジョア民主主義を打ちくだき、ブルジョアジーを弾圧し、資本主義に復帰しようとする他のすべての階級のあらゆる試みを弾圧し、勤労者に真の自由と平等をあたえ（これは、生産手段の私的所有を廃止するときにはじめて実現できることである）、彼らに「権利」をあたえるだけではなく、さらに彼らにブルジョアジーから取りあげたものを現実享受させるのである。

プロレタリアートの独裁（同じことであるが、ソヴェト権力またはプロレタリア民主主義）のこの内容を理解できなかったものが、この言葉を受けいれてもむだである。

大きな実用主義とちっぽけな真理

ここでは、この考えをもっとくわしく述べるわけにはいかないが、わたしはこの考えを『国家と革命』と小冊子『プロレタリア革命と背教者カウツキー』のなかで述べておいた。わたしは、一九一九年八月十日にひらかれるベルン・インタナショナルのルツェルン大会への代議員たちによるこの小論をささげて、筆をおくことができる」（全集第四版、第二十九巻、四七一―四七四ページ、訳五二二―五二四ページ、傍点レーニン、ゴシック体および「」内―山本）。

われわれは、これらの諸労作のなから、まず、「プロレタリアートの独裁」とはどういうことかということ、具体的な例をあげて、だれにもわかるように、しかもはつきりと説明している論稿個所をとりだしてつきにかかげることにしよう。それは、レーニンはじめに労作『カデットの勝利と労働者党の任務』のなかで述べたものであるが、それから十四年たつて一九二〇年にものした覚え書『独裁の問題の歴史によつて』のなかで、レーニンは右の労作をもう一度とりあげ、そのうちの独裁にかんする説明部分を「もっとも重要な考察」だとしてその「全部」を用いているのである。われわれがつきにあげるのは、紙数の制限上、その「全部」のうち、「独裁」をもっとも的確に解き明かしている二つの箇所である。

「モスクワでは射撃の響きもしいにとだえ、軍事警察的独裁がその狂暴な騒宴をあげ、管刑と大量拷問がロシア全土でおこなわれていたまさにそのときに、カデットの新聞では、左からの暴力や、革命的諸党派のストライキ委員会にたいする非難の声があげられていた。ドゥバソフらに金をもらつて、学問を商なっているカデットの教授諸君は、『独裁』という言葉をも、『特別警備』という言葉に翻訳するまでになつた！ 『科学者』ともあろうものが、革命的闘争をはずかしめるために、彼らの中学校的ラテン語さえ歪曲したのだ。カデット派の諸君よ、これかぎり永久に参考にしてもらいたい、独裁とは法律に依拠するのではなく、暴力（ВАСИЛИК）に依拠する、無制限の権力を意

味する。内乱の時期には、すべて勝利した権力は、独裁でしかありえない。だが問題は、多数者にたいする少数者の独裁、人民にたいするひとにぎりの警吏の独裁もあるし、ひとにぎりの暴圧者、略奪者、人民権力の横奪者にたいする大多数の人民の独裁もあるということである。『独裁』の科学的概念を俗悪に歪曲することによって、もっとも無法な、もっとも卑劣な、右からの暴力が跳梁している時期に、左からの暴力に反対だと泣きわめくことによって、カデット諸君は、革命的闘争の激化したさいの『協定派』の立場がどのようなものであるかを、はっきり示した。闘争が燃えさかるとき、『協定派』はびくびくして身をひそめる。革命的人民が勝利すると(十月十七日)、『協定派』は、穴からはい出してきて、ほこらしげに身づくろいして、口から出まかせにまくしたて、耳も聳せんばかりに、これは『輝かしい』政治的ストライキであった、とさげふ。反革命が勝利すると、『協定派』は、敗北者に偽善的な忠告や訓戒を浴びせかけはじめる。勝利したストライキは、『輝かしい』ものであった。敗北したストライキは、犯罪的で、野蛮で、無意味で、無政府主義的なものであった。敗北した蜂起は狂気の沙汰であり、盲目的なばか騒ぎであり、蛮行であり、愚行であった。一言でいえば、『協定派』の政治的良心と政治的分別は、いま強いほうにこびへつらい、闘争しているものの足にまつわりつき、あるときはこちらの、あるときはあちらの邪魔をし、闘争をにぶらせ、自由のために決死の闘争をしている人民の革命的意識をにぶらせることにある」(全集第四版、第三十一卷、三二〇―三二二ページ、訳三四七―三四八ページ、ゴシック体―山本)。

つづいて、レーニンは、ロシア第一次革命について一九〇五年十月―十二月の第一期と一九〇六年のカデットの国会の時期の第二期とを対比して第一期を「理論と実践とが食いちがひ、社会民主主義的原则と思想が消え失せた、革命的旋風の時期」、第二期を「思考と理性をとりもどした時期」として特徴づけてこれを論じているカデットのエル・ブランクの

主張をとりあげてこれに反駁を加えつつ、「独裁」の眞の意味内容を、じゅんじゅんとさとすように、そして、あま  
すところなく明快に解き明かしている。

「けれども、『旋風』期には、マルクス主義の原理と思想がすべて消えてしまったかのようにいう、この途方もなく  
誤った意見をブランク氏にいだかせる動機となった本当の理由は、どのようなものか？ その事情をしらべてみるこ  
とは、非常に興味ぶかい。それは、政治における小市民根性の眞の本性を、さらにもう一度、われわれの前に暴露す  
るものである。

政治活動のいろいろのやり方の見地と、人民の歴史的創造のいろいろな方法の見地からみれば、『革命的旋風』期  
と現在の『カデット』期との主要な違いは、どういう点にあったのか？ なによりもまず、また主として、『旋風期』  
には、政治生活の他の時期には見られない、若干の特殊な、歴史的創造の方法が適用されたという点にあった。これ  
らの方法のうち、もっとも本質的なものは、(一)人民が政治的自由を、『奪取』すること———という権利や法律に  
もよらない、どういう制限もつけずに、自由を実現すること(集会の自由———大学の学内においてさえも———出版、  
結社、会合の自由、等)。(二)新しい革命権力機関———労働者、兵士、鉄道従業員、農民の代表ソヴェト、農村と都  
市の新しい官庁、等々———を創設することである。これらの機関は、もっぱら住民の革命的諸階層によってつくりだ  
された。それは、あらゆる法律や規範を抜きにして、完全に革命的な方法で、自主的な人民の創造力の産物として、  
古い警察的足かせから自分を解放したか、または解放しつつある人民の自主活動の現われとしてつくりだされた。最  
後に、それは、構成や機能の点でまったく萌芽状態にあり、自然発生的で、はっきりした形をもたず、漠然としたも  
のであるにもかかわらず、ほかならぬ権力機関であった。ソヴェトは、たとえば印刷所を奪取し(ペテルブルグ)、

革命的人民がその権利を実現するのを妨害した警察官吏を逮捕したりして、**権力** (Власть) として行動した（それぞれの新しい権力機関がもっとも弱く、旧権力がもっとも強力であったベテルブルグでも、いくつかの事例があった）。それは、旧政府に金をやるなど全人民に呼びかけることで、**権力**として行動した。それは、旧政府の金を没収し（南部の鉄道ストライキ委員会）、それを新しい人民の政府の必要にふりむけた。——そうだ、それは、疑いもなく、新しい人民政府——おのぞみならば、革命政府——の萌芽であった。その社会的・政治的性格の点では、これは、人民の革命的分子の独裁の萌芽であった。君たちは、驚いているのか、ブランク氏とキゼヴェッテル氏よ？ 君たちは、ここに、ブルジョアにとつては独裁と同じ意味の『特別警備』を見ないのか？ 君たちが、**独裁**という科学的概念についてなんの観念ももっていないことを、われわれはすでに君たちに述べておいた。われわれは、いますぐそれを君たちに説明しよう。だが、はじめに、『革命的旋風』期の第三の行動『方法』、すなわち人民の暴圧者にする人民の暴力 (насилие) の行使を教示しよう。

上述の権力諸機関は、萌芽状態の独裁であった。なぜなら、この権力は、だれから由来するものにせよ、他のいかなる権力も、いかなる法律も、いかなる規範もみとめていなかったからである。**無制限の、法律外の、もっとも直接的な意味での力をよりどころとした権力、これこそ独裁である**。だが、この新しい権力がよりどころとしていた、またよりどころとしようとしていた力 (сила) は、ひとにぎりの軍人にぎられた銃剣の力でもなく、『区警察署』の力でもなく、金の力でもなく、どんなものにせよ、従来の、すでに確立している制度・施設の力でもなかった。けっしてそんなものではなかった。新しい権力の新しい諸機関には、武器も、金も、古い制度・施設もなかった。その力は——想像できますか、ブランク氏とキゼヴェッテル氏よ？——それは古い暴力手段とは縁もゆかりもな

く、警察その他の旧権力機関による人民の抑圧から人民を強力に保護すること (Усиленная охрана) を念頭におかなければ、『特別警備 (Усиленная охрана)』とは縁もゆかりもなかった。

では、この力は、いったい、なにを振りどころとしていたのか？ それは、人民大衆を振りどころとしていたのである。まさにこれが、旧権力のあらゆる従来の機関と、この新しい権力との基本的な相違である。前者は、人民にたいする、労働者・農民大衆にたいする少数者の権力機関であった。後者は、少数者にたいする、ひとにぎりの警察的暴圧者にたいする、一群の特権的貴族や官僚にたいする、人民、労働者・農民の権力機関であった。これが、革命的人民の独裁と、人民にたいする独裁との相違である。このことをよくおぼえておくがいい、ブランク氏とキゼヴェツテル氏〔と日共指導層諸君〕よ！ 少数者の独裁としての旧権力は、もっぱら警察の詭計によって、権力への参加と権力にたいする監視とから人民大衆を遠ざけ、排除することによってのみ、持ちこたえることができた。旧権力は、系統的に大衆を信頼せず、光明をおそれ、欺瞞によって持ちこたえていた。新しい権力は、圧倒的多数者の独裁として、もっぱら、膨大な大衆の信頼によって、またもつとも自由に、もつとも広範に、もつとも強力に、全大衆を権力に参加させたことよってのみ持ちこたえることができたし、また持ちこたえたのである。かくされたことも、秘密なことでもないし、規則も、形式もない。君は——労働者だね？ 君は、ひとにぎりの警察的暴圧者からロシアを解放するためにたたかうことをのぞんでいるのだね？ それなら君は、われわれの同志だ。自分の代表をえらびたまえ。いますぐ、即刻、適当とおもう者をえらびたまえ。われわれは、わが労働者代表ソヴェト、農民委員会、兵士代表ソヴェト、等々の完全な権限をもつ一員として、すすんで、よろこんで、彼を受けいれよう。これは、すべての人々に公開され、すべてを大衆の眼前でおこなう、大衆の近づきやすい、直接に大衆から出ている権力であり、

人民大衆とその意志の、じかの、直接の機関である。——これが、新しい権力、より正確に言えば、その萌芽であった。萌芽というのは、旧権力の勝利が、若い植物の芽をひじょうにはやく踏みにつけてしまったからである。

ブランク氏、またはキゼヴェツテル氏よ、——「そしてまた、日共指導層諸君よ」——君たちは、おそらく質問するだろう。この場合、『**独裁**』<sup>ディクタクツァー</sup>はなんのためなのか、『**暴力**』は、なんのためなのか？ はたして、膨大な大衆が、ひとにぎりの人間にたいして、暴力を必要とするだろうか？ はたして何千万人、何億人の人間が、一千人や一万人の人間にたいして**独裁者**となることができるだろうか？ と。

こういう質問を出すのは、ふつう、**独裁**という用語が自分にとって新しい意味で用いられるのをはじめて見た人たちである。人々は、警察権力と警察的独裁しか見なれていない。彼らには、およそ警察というものをもたない権力がありうることや、警察的でない独裁がありうるということは、奇妙におもわれる。何百万人にとっては、何千人かにたいする暴力は必要でないと君たちは言うのか？ 君たちは誤りをおかしている。その誤りは、現象をその発展において見ないところからきている。君たちは、新しい権力が天から降ってくるのではなく、旧権力とならんで、旧権力に対抗して、旧権力との闘争のなかで、発育し、発生するということを、忘れていた。権力手段と権力機関をにぎっている暴圧者にたいする暴力なしには、人民を暴圧者から解放することはできないのだ。

ブランク氏とキゼヴェツテル氏よ「そしてまた、日共指導層諸君よ」、カデットの理性にとつては近づきがたく、カデットの思考「と日和見主義的俗物観念」にとつては『目のまわるような』、この理解しがたいことを君たちが会得できるように、君たちに、ほんの簡単な例を出してやろう。アヴラーモフ「カザック将校」がスピリドノヴァ「タンポフ県農民運動鎮圧者を暗殺したエス・エル党员」を傷つけ、拷問すると想像したまえ。スピリドノヴァのがわ

には、何十人か何百人かの武器をもたない人々がいると仮定しよう。アヴラーモフのがわには、ひとにぎりのカザックがいる。拷問部屋以外のところでスピリドノヴァの拷問がおこなわれるとしたら、人民はどうすべきだろうか？ 彼らは、アヴラーモフとその従者にたいして、暴力（*violence*）を用いるであろう。人民は、おそらく、アヴラーモフらに射殺される若干の戦士を犠牲にするだろうが、それにもかかわらず、実力で（*force*）アヴラーモフとカザックを武装解除するであろう。しかも、ひじょうにありそうなことだが、人民は、この連中——失礼な言い分だが——の幾人かを、即座に殺してしまうであろうし、残りは、これ以上彼らが暴れるのを妨げるために、そして彼らを人民裁判にかけるために、どこかの牢獄にぶちこむであろう。

そう、どうです、ブランク氏とキゼヴェッテル氏よ〔そしてまた、日共指導層諸君よ〕、アヴラーモフとカザックがスピリドノヴァを拷問するなら、それは人民にたいする軍事警察的独裁である。革命的（暴圧者にたいして闘争する能力をもち、忠告や教訓や憐れみや非難や泣き言や繰り言だけを能とせず、小市民的に偏狭でない、革命的な）人民がアヴラーモフとアヴラーモフ一味に暴力を用いるならば、それは革命的人民の独裁である。それは、独裁である。なぜなら、それはアヴラーモフらをおさえつける人民の権力であり、どんな法律にも拘束されない権力であるからである（小市民〔と日共指導層諸君〕は、おそらく実力でアヴラーモフからスピリドノヴァを奪いかえすことに反対するであろう。彼らは言うであろう、これは『法律』によっていない！ アヴラーモフを殺すような『法律』がわが国にあるだろうか？ 小市民階級の若干のイデオログは、悪にたいして暴力を用いないという無抵抗の理論をつくりだしてはいないか？ と）。独裁という科学的概念は、なにもにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなにもをも意味しない。『独裁』

という概念は、これ以外のなにものも意味しない。カデット諸君〔そしてまた、日共指導層諸君〕、このことをしっかり覚えておくがいい。さらに、われわれの取りあげた例のなかに、われわれは、ほかならぬ人民の独裁を見ているのだ。なぜなら、人民、すなわち、はっきりした形をなさない、その場に『偶然』あつまつた住民大衆自身が、直接舞台上で登場し、みずから裁判と制裁をおこない、権力をもち、新しい革命的法律をつくりだしているからである。最後に、これはほかならぬ革命的、人民の独裁である。なぜ、ただ革命的人民の独裁であつて、全人民の独裁ではないのか？ それは、アヴラーモフの武勇伝によつて、たえず、もつとも残酷に苦しめられている全人民のなかに、肉体的にうちひしがれた人々、おどおどした人々、たとえば悪にたいしても暴力で抵抗しないという理論によつて精神的にうちひしがれた人々、あるいはまた理論によつてではなくたんに偏見、習慣、因襲によつてうちひしがれた人々、無関心な人々があり、俗物とか、小市民とか呼ばれて、鋭い闘争を避けたり、横をむいて通りすぎたり、逃げかくれさえする（喧嘩に飛びこむなんて、まっぴらだ！）ことにむしろ適している人々がいるからである。だからこそ、独裁を実現するのは全人民ではなくて、革命的人民だけなのである。といつても、革命的人民はすこしも全人民をおそれるものではなく、自分の行動の理由と行動の詳細の全部を全人民にぶちまけ、全人民を、よろこんで国家行政に参加させるだけでなく、権力へも、また国家機構そのものへも参加させるのである。

こうして、われわれのあげた簡単な例は、『革命的人民の独裁』という科学的な概念と、さらに『軍事』、『警察的独裁』という概念のあらゆる要素をふくんでいる。カデットの学識ある教授にすら理解できるこの簡単な例から、われわれは、社会生活のもつと複雑な現象にうつることができる。

革命とは、狭い、直接的な意味では、アヴラーモフ一味の武勇伝にたいする、幾世紀にもわたつて積みかさなつた

敵意が、言葉でなく、行動となつて外面にほとばしり、しかも個々人の行動としてではなく、何百万の人民大衆の行動として表面にほとばしってくる、人民生活の一時期である。人民は目ざめ、アヴラーモフ一味から自分解放するために立ちあがる。人民は、ロシア生活の無数のスピリドーノヴァをアヴラーモフ一味から解放し、アヴラーモフ一味にたいして暴力を用い、アヴラーモフ一味をおさえるための権力をにぎる。これは、もちろん、キゼヴェツテル教授〔と日和見主義的俗物〕のためにわれわれが簡単にして述べた例ほど、簡単に、『一挙に』おこるものではない。アヴラーモフ一味と人民とがこのように闘争すること、狭い、直接的な意味でこのように闘争すること、アヴラーモフ一味を人民からこのように投げ棄てることは、『革命的旋風』の数カ月、数年にもおよぶものである。アヴラーモフ一味を人民が自分の身からこのように投げ棄てることこそ、ロシア大革命と呼ばれるものの現実の内容である。このように投げ棄てることは、それを歴史的創造の諸方法という面から見れば、われわれがついさきほど革命的旋風について述べるさいに説明したあの形態でおこなわれるのである。すなわち、人民による政治的自由の奪取、つまりアヴラーモフ一味がその実現を妨げてきた自由の奪取、人民による新しい革命権力の創出、アヴラーモフ一味を抑えつける権力、旧警察制度の暴圧者たちにたいする権力の創出、すべてのアヴラーモフ一味、ドゥルノヴォとドゥバソフの一味、ミーノフ一味、その他等々といった野良犬を排除し、武装解除し、無害にするために、アヴラーモフ一味にたいして人民の暴力を用いる、という形でおこなわれるのである。

人民が、自由を奪取し、新しい、形式的にはだれからも承認されていない、革命権力を創出するといったような、法律によらない、秩序を無視した、無計画的な、非組織的な闘争方法をつかい、人民の抑圧者にたいして暴力をつかうことは、良いことだろうか？ そうだ、これはひじょうに良いことだ。これは、自由をめざす人民闘争の最高の現

われである。これは、ロシアのすぐれた人々の自由についての夢が、実行に、しかも個々の英雄の実行ではなく、人民大衆自身の実行に、具体化される偉大な時期である。これは、(われわれの例では) 群集がアヴラーモフからスピリドノヴァを解放し、アヴラーモフを暴力的に武装解除し無害にするのが良いのと同じように、良いことである。

だが、ほかならぬことで、われわれは、カデット「と日和見主義的俗物」の秘められた考えや懸念の中心点に近づく。カデット「と日和見主義的俗物」が小市民階級のイデオログであるのは、アヴラーモフからスピリドノヴァが拷問されるといわれわれの例では、カデット「と日和見主義的俗物」が群集を引きとめ、法律に違反しないよう忠告し、合法的権力の名で行動している紋刑事の手から犠牲者を解放するのをいそがないよう忠告する俗物の観点を、政治に、全人民の解放に、革命に持ちこんでくるからである。もちろん、われわれの例では、このような俗物は、まったくの精神的不具者であろうが、社会生活全体に適用すれば、小市民の精神的不具は、くりかえして言うが、決して個人的な性質ではなく、おそらく、ブルジョア俗流法学がしっかり頭のなかに播きつけた偏見から生じた社会的性質なのである。

なぜ、ブランク氏は、『旋風』期にはマルクス主義的原理がすべて忘れられたということをし、証明する必要もないと考えているのか？ それは、彼が、自由の奪取や、革命的権力の創出や、人民による暴力行使というような『原理』を、マルクス主義的原理とは考えずに、マルクス主義をブレントナーノ主義に歪めているからである。このような見解がブランク氏の論文全体からうかがわれる。いや、それはブランク氏ひとりではなく、すべてのカデット「そして日共指導層全員」がそうであり、『ベズ・ザグラヴィヤ』のベルンシュタイン主義者、プロコポヴィチ、クスコヴァその他をふくめて、カデットを愛しているというので現在プレハーノフをほめたたえている自由主義的・急進的

陣営のすべての文筆家がそうである。

この見解がどういうふうにして生まれたか、また生まれざるをえなかったかを、見ることにしよう。

この見解は、西ヨーロッパの社会民主主義のベルンシュタイン的な、もつとひろく言って、日和見主義的な理解から直接生まれたものである。西ヨーロッパの『正統派』が、系統的に、全面的に暴露した、こういう理解の誤りが、いま『こつそりと』、別のソースをふりかけて、別のきっかけでロシアに輸入されている。ベルンシュタイン主義者は、その直接革命的な側面をのぞいて、マルクス主義を受け入れたし、いまも受けいられている。彼らは、議会闘争を、とくに一定の歴史的時期に有効な闘争手段の一つとはみなさないで、主要な、ほとんど唯一の闘争形態、『暴力』、『奪取』、『独裁』を不必要にする闘争形態とみなしている。マルクス主義のこの卑俗で、小市民的な歪曲を、いまロシアにうつしているものこそ、ブランク氏やその他、ブレハーノフの自由主義的讚美者諸君である。彼らは、この歪曲にあまりにも慣れてしまったので、革命的旋風期にマルクス主義の原理と思想が忘れられているのを証明することを必要とすら考えていない。

なぜ、このような見解が生まれざるをえなかったか？ それは、この見解が小ブルジョア階級の地位と利益とももつともふかく合致しているからである。『純化された』ブルジョア社会のイデオログは、革命的人民が『旋風』期にもちいる闘争方法、そして革命的社会民主主義派がそれを持ちいることを奨励し援助する闘争方法をのぞきさえすれば、社会民主主義の闘争方法をすべて容認する。ブルジョア階級の利益は、プロレタリアートが専制との闘争に参加することを要求する。だが、それは、プロレタリアートと農民が首位を占めることに変わっていくことのないような参加、古い、専制的・農奴制的・警察的権力機関を完全になくしてしまうことのないような参加にすぎない。



「カウツキーは、つぎのように論じている。

(一)「搾取者は、つねに住民のうちでごく少数を占めていたにすぎない」(カウツキーの小冊子の一四ページ)。

これは、争う余地のない真理である。では、この真理から出発して、どう論ずるべきなのか？ マルクス主義的・社会主義的に論ずることもできる。そのときには、搾取者と被搾取者との関係を基礎にしなければならぬ。また、自由主義的・ブルジョア民主主義的に論ずることもできる。そのときには、少数者と多数者との関係を基礎にしなければならぬ。

マルクス主義的に論ずるとすれば、こう言わなければならない。搾取者は、不可避的に国家(ここでは民主主義、すなわち国家の諸形態のひとつが論じられている)を、被搾取者にたいする自階級の、すなわち搾取者の、支配の道具に転化させる。だから、多数者である被搾取者を支配する搾取者がいるかぎり、民主主義国家もまた不可避的に搾取者のための民主主義となるであろう。被搾取者の国家は、このような国家とは根本的にちがったものでなければならぬ。それは、被搾取者のための民主主義でなければならぬし、搾取者を圧迫することではなければならない。ところが、一階級を圧迫するとは、この階級に平等を与えないことを意味し、その階級を「民主主義」から除外することを意味する、と。

自由主義的に論ずるならば、こう言わなければならない。多数者は決定し、少数者は服従する。従わないものは、罰せられる。それだけだ。一般的には国家の、とくに「純粹民主主義」の階級的性格を論ずるにはおよばない。これは問題には関係がない、なぜなら、多数者は多数者であり、少数者は少数者だからである。一ポンドの肉は一ポンドの肉である、それでたくさんだ、と。

カウツキーは、まさにつぎのように論じている。

(二)「なぜプロレタリアートの支配は、民主主義と両立しないような形態をとるべきであり、またとらざるをえないのか？」

(二一ページ)。

これにつづいて、プロレタリアートは多数者であることが説明されている。この説明は、非常にくわしく、また非常にくどくどしく、マルクスからの引用もあればバリー・コンミュンにおける投票数もあげられている。結論はこうである、「大衆のうちにこのように強力に根を張っている政体には、民主主義を侵害する動機はすこしもない。このような政体は、民主主義を圧迫するために暴力がもちいられるような場合には、必ずしも暴力なしにすまずことはできない。暴力に報いるものは、暴力だけである。が、しかし、背後に大衆がひかえていることを知っている政体は民主主義を廃絶するためでなく、それを守るためにしか、暴力をつかわないであろう。もしこの政体が、自分のもつとも確実な基礎、つまり普通選挙権を、すなわち強大な道徳的権威の深い源泉を廃止しようとするならば、それはまことに自殺行為であろう」(二二ページ)。

ごらんのようにカウツキーの「そしてまた、日共指導層諸君の」議論のなかからは、搾取者と被搾取者との関係は消えてなくなっている。あとに残っているのは、多数者一般、少数者一般、民主主義一般、すでにわれわれにおなじみの「純粹民主主義」だけである。

このことがバリー・コンミュンにかんじて論じられている点に注意したまえ！では、はっきりさせるために、マルクスとエンゲルスが、コンミュンにかんじて、独裁について言っていることを引用しよう。

マルクス……「ブルジョアジーの抵抗をうちくなくするために……労働者が、ブルジョアジーの独裁のかわりに彼ら自身の革命的独裁をもってするなら……労働者は、国家に革命的・過渡的な形態をあたえる」。

大きな実用主義とちっぽけな真理

エ、ンゲルス……（革命で）「勝利した党は、彼らの武器が反動どもに呼びおこす恐怖によって、この支配を持続させなければならぬ。もしバリー・コンミュンが、ブルジョアジーにたいして武装した人民のこの権威を行使しなかつたとしたら、コンミュンは、ただの一日でももちこたえただであらうか？ それどころか、コンミュンがこの権威を十分広範に行使しなかつたという点で、それを非難しなければならないのではあるまいか？」

おなじく、エ、ンゲルス……「国家は、鬭争において、敵を暴力的に抑圧するためにもちいる過渡的な施設にすぎないので、自由な人民国家をうんぬんするのは、まったくの無意味です。プロレタリアートがまだ国家を必要とするあいだは、自由のためではなく、その敵を抑圧するために必要とするのであって、自由を論ずることができるようになるやいなや、国家そのものは存在しなくなりす」。

カウツキーとマルクス・エ、ンゲルスとのあいだには、自由主義者とプロレタリア革命家とのあいだのように天地の差がある。カウツキーの述べている純粹民主主義とたんなる「民主主義」とは、「自由な人民国家」の言いかえにすぎない。すなわち、まったくの無意味である。カウツキー「とブルジョア国会一辺倒の日和見主義的指導者たち」は、いとも博学なばか学者のような博学ぶりである。あるいは一〇才の小娘のような無邪気さで、質問する、——多数を占めているのに、なぜ独裁なんて必要なのだろうか？ と。ところが、マルクスとエ、ンゲルスはこう説明する、

——ブルジョアジーの抵抗を打ちくだくためだ。

——反動どもに恐怖を感じさせるためだ。

——ブルジョアジーにたいして武装した人民の権威を持続させるためだ。

——プロレタリアートが、自分の敵を暴力的に抑圧できるためだ。

カウツキー「とブルジョア国会の前に拝跪する日和見主義的指導者たち」には、こういう説明がわからない。民主主義の「純粹さ」にほれこんでそのブルジョア性が目につかない彼「と彼ら」は、多数者は多数者なのだから、少数者の「抵抗を打ちくたく」必要はない、それを「暴力的に抑圧」する必要はない、——民主主義がおかされる場合を鎮圧すれば十分である、と「徹底的」に主張する。民主主義の「純粹さ」にほれこんだカウツキーと「その現代的エピソードも」は、すべてのブルジョア民主主義者がいつもおかしているあの小さな誤りを、はからずもおかしている。すなわち、彼「と彼ら」は、形式的な平等（資本主義のもとでは徹頭徹尾いつわりの偽善的な平等）を事実上の平等とおもっているのである！ 小さなことだ！

搾取者は、被搾取者と平等ではありえない。

どれほどカウツキーには不愉快であろうとも、この真理は、社会主義のきわめて本質的な内容をなすものである。

いまひとつの真理は、ある階級が他の階級を搾取するあらゆる可能性が完全に廃絶されないかぎり、真の事実上の平等はありえない、ということである」（全集第四版、第二十八卷、二二九—二三二ページ、訳二六四—二六八ページ、傍点——レーニン、ゴシック体および「——内——山本）。

以上の引用によって、独裁、すなわちプロレタリアートの独裁という科学的概念の基本的内容は、十分明らかにされたものとおもわれるが、なお、——現代版キゼヴェツテルやら最新版カウツキー主義者やら、雑多の指導者の輩出にかんがみて——独裁の本質を、いささかの疑念ものこさないようにこのうえもなく厳密・的確に要約している、レーニンの言葉を二つ、つぎにあげておこう。

「独裁は、直接に暴力に立脚し、どんな法律にも拘束されない権力である。」

プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの暴力によってたたかいたられ維持される権力であり、どんな法律にも拘束されない権力である」(前出、第二十八巻、二二六ページ、訳二四九ページ、ゴシック体―山本)。

「独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧することであり、したがって、この階級にたいして、「純粹民主主義」を、すなわち平等と自由とを破壊、することである」(前出、第二十八巻、二三五ページ、訳二七一ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本)。

以上かかげたのはすべて、レーニンがくりかえし明確に教示しているものばかりである。公認のマルクス・レーニン主義者ならずとも、およそレーニンの主な労作に眼を通じたことのあるほどの者ならば、だれひとりとして知らないものはないところである。それらは、レーニンが明確にうちだしたもつとも基本的な核心理論であって、まさにマルクス・レーニン主義の精髓をなしているものといつてよい。

ところで、さきあげた西沢富夫委員の報告は、日本共産党第十二回大会で採択されたと記されているので、「独裁」を『執権』にあらためることに「ついて」の報告内容は、日本の唯一のマルクス・レーニン主義党をもつて自任する日本共産党指導層全員の公式見解であるといわなければならない。そこで、あらためて、つぎに、レーニンの明確な教示と、日共指導層の見解を代表した西沢報告の内容とを、つきあわせて検討してみることにしよう。それによつて、はたして、日共指導層の唱える解釈が「マルクス、エンゲルス、レーニンの文献からあきらかな規定にたたくそつたものであるか、それともそれらの規定と真つ向うから敵対するもの、それらの規定を完全にふみにじるものであるかは、誰の目にも明らかとなるであろう。

まず、レーニンは、「プロレタリアートの独裁」ということがマルクス主義にとって決定的に重要な一核心、その精髓部分となっていることを明確にし、このことを的確に把握し、そのためにたたかう者だけがマルクス主義者の名に値するものだとすることを力説し強調している。ところが、西沢委員は、右の「報告」につづく「結語」のなかで、「問題は、『ディクタトゥーラ』の本質と内容をより適切に、日本語に表現することである」と述べていながら、その肝腎の「本質と内容」については、レーニンがくりかえし教示しているところにはまったくふれることなく、これをたんなる「独裁」におきかえ、しかも、この「独裁」をばさらに、「ひとつの階級あるいは複数の階級・階層の政治支配、あるいは国家権力を示すもの」とか、「国家権力の階級の本質をあらわすもの」とかいった、国家の一般的な性質規定にすりかえて、それでおしまいにしている。諸君、この「ひとつの階級の国家権力または政治支配そのものの階級の本質をあらわすもの」が「独裁」だという、この説明をとくとごらんいただきたい。これがわが国で唯一のマルクス・レーニン主義党を自負する日共指導層全員のもちあわせている「独裁」についての知恵の全部だそうである。しかもこれが「マルクス、エンゲルス、レーニンの文献から明らか」な説明だそうである！ この安手の、まさに三百代言よろしくの説明が、レーニンの的確な教示とどんなにへだたっているかは、だれの眼にもあきらかである。この連中は、マルクス主義理論のもっとも重要な精髓、マルクス国家理論の核心をなす問題をば、ただの「国家権力の階級の性質」の問題にまんなまとすりかえてしまっているのである。では、おたずねるが、「国家権力の階級の本質」とは、いったい、どういうことか？ 説明してみるがいい。ブルジョアジーが「政治的に支配」をしていれば、その「国家権力の階級の本

質」は「ブルジョア的」であり、したがって、そこには「ブルジョアジーの独裁」があるというのか？ それならば、およそこの地球上の社会は——将来の共産主義社会をのぞいて——すべて階級社会であり、必ず支配階級と被支配階級との階級対立があり、支配階級は国家権力を掌握して被支配階級を搾取・抑圧しているのであるから、すべての階級社会には支配階級の政治的支配すなわちその独裁があることになる。つまり、日共指導層の考案した『「独裁」の本質と内容を、より適切に表現する』説明方法によって、「独裁」は、「政治的支配」一般とまったく同じものに、つまり完全に無内容のものに仕立てられてしまうのである。これは、おどろくべき修正・改ざんといわなければならぬ。だが、このまぎれもないすりかえ・改ざんも、実は、以下にみるように、その内心にある「狙い」を達成するための必要不可欠の手にすぎないのである。だが、その内心の「狙い」にうつるまえに、右のようなすりかえの必然的な論理的帰結について簡単に注意しておこう。目的達成のためには手段をえらばないという手合は、当然のことながら、こうした論理的帰結をひきだすという論理的思考の能力に欠けているものである。現在日本で「政治支配」をしているのは、ブルジョアジー一般、とくには金融資本家階層であることは、周知のところである。だから、日共指導層の「独裁」概念にしたがえば、日本では、ブルジョアジーもしくは金融資本家階層の独裁がりっぱにおこなわれている、この階級が国家権力を掌握していることになる。つまり、そこにある「民主主義」一般とか「民主主義と自由」とかは、この独裁を隠蔽する形式にすぎず、むしろ、本質・独裁と形式・民主主義とはうまく一体を成しているものだというわけである。ところが、彼らは、形式・民主主義の方に必死にしがみついているが、それは、この「民主主義」の力に頼ってその内容であるブルジョアジーの独裁をひっくりかえそうというのである。これは、弁証法的思考どころのさわぎではない、まともな形式論理の能力すら欠けていることを告白しているものといつてよい。

ところで、決定的な問題は、独裁の「本質と内容」にある。「マルクス、エンゲルス、レーニンの文献からあきらか」と称しながらこれとあべこべのたわごとばかり並べている日共指導層は、よく眼を開いて、レーニンがくりかえし指示しているところをしかと読みなおすがいい。レーニンは、なんと教えているか？

「独裁という科学的概念は、なにもものにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなにもものをも意味しない。『独裁』という概念は、これ以外のなにもものも意味しない。ブルジョア自由主義者諸君、このことをしっかり覚えておくがいい」(傍点―レーニン)。

「独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧することであり、したがって、この階級にたいして、「純粹民主主義」を、すなわち平等と自由とを破壊することである」(傍点―レーニン)。

この上もなく明確に示されているレーニンのこの「独裁」概念を、日共指導層の説く「独裁」概念と、くらべてみるがいい。彼らは、「権力について政治支配をおこなう」ことが独裁なのだと言っている(『前衛』前出、二五七ページ)。こんな説明が、レーニンの規定とは似ても似つかない、まったくのたわごとであることは、だれにでもすぐわかる。

第一に、レーニンは、「なにもものによっても制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない」と明示しているのに、彼らは、ブルジョア的國家機構もそのままにしておき、ブルジョア的法律に忠実にしたがってやると言っている。

第二に、レーニンは「直接暴力に依拠する権力」ということを「独裁」概念の中心に据えているのに、彼らは、これを黙殺するばかりか、その反対に暴力を極力排撃して「民主的・平和的」に権力をとることだと強弁している。

第三に、レーニンは、「ブルジョアジーを暴力的に抑圧して、彼らには民主主義も平等も自由も与えない」ものだ

と明示しているにもかかわらず、彼らは、この教示を恥しらずにも踏みまじって、「ブルジョアジーにたいしても完全に民主主義と自由と平等とを保証し、おまけに政党組織も政権獲得のための政治活動も十二分に保証してやる」ものだと、言い張っている。これほど、レーニンの明白な教示を厚かましくもふみにじり、泥をなすりつけ、これと真っ向うから背反する主張をかかげて平然としている鉄面皮な背教者が、これまでにひとりでもいただろうか！

あつかましくもレーニンをふみにじり、公然と裏切るような「独裁」概念をかかげる日共指導層にとつての唯一の関心事は、この改ざんした「独裁」概念をいちはやく大衆にのみこましてしまうことである。そのために考えだされたのがつぎの二つの手であつて、そのひとつは、まず「独裁」という従来 of 訳語を放逐すること、そのために「ディクタトゥラ」などという片仮名をつかい、その内容をすりかえてしまう。いまひとつは、こうしてまんまとすりかえた「ディクタトゥラ」の内容を「永久に」のみこませてしまうのに好都合な「執権」という訳語をつくり、これを「徹底的に」おしひろめるといふ手である。

彼らは、まず、「ディクタトゥラ」といふ文字をかつぎだして、「独裁」といふ訳語は、『ディクタトゥラ』の本当の意味とは合致しない」とか、「日本語の一般の語感」として「独裁」といふ訳語はまずいとかう、屁理窟をならべ、さらに、反対派をだしにひっぱつてきて、「議會制民主主義とか言論・表現・出版・集会・結社の自由とか複数政党制とかいつても、結局、『一党独裁』をねらっているなどと、わが党にいわれのない攻撃を加えている。そのねらいは、いうまでもなく科学的社会主義の理論に接するにいたっていない多くの人たちに誤解をあたえることにある」と述べたて、この「いわれのない攻撃」をはねかえして「誤解」をとくためにも「独裁」といふ「不適当な訳語」は絶対にやめるべきだ、と論じている。こういう屁理窟や論じ方は、とつくのむかしから小ブル的俗物や背教者たちが使い古してきたものであつて、わが日共指

導層は忠実にその口真似をしているだけなのである。まず、「独裁」という訳語が不適當だとか、「日本語の一般的語感」としてまずいかいいう屁理窟のたぐいをもっともよく「論理的」にならべてこの重要な科学的概念の根本的改ざん、修正をくわだてた「すぐれた先達」としては、傑出した「科学的社会主義者」カウツキーがあげられなければならない。そこで、参考までに、この先達カウツキーの巧妙な改ざんの手口と、これを完膚なきまでに暴露・粉碎しているレーニンの所論とを、名著『プロレタリア革命と背教者カウツキー』によって見てみよう。なお、つぎの引用のはじめに出てくる「マルクスの『一片の言葉』」というのは、つぎのとおりである、——「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁でしかありえない」。

「カウツキーが、プロレタリアートの独裁というマルクスの「一片の言葉」を、どんな注目すべきやり方で「解釈」したかを見るならばこのこと「すりかえの名人——山本」はもっと納得できる。ききたまえ。

「残念なことにマルクスは、この独裁をどう考えているかを、いっそうくわしく示すことをおこたった」。……（これは、背教者のまったくのうそっぱちの文句である。というのは、マルクスとエンゲルスは多くの非常にくわしい指示を實際あたえているが、マルクス主義における経文読みであるカウツキーはわざとこれを避けているからである）。……「文字どおりにとれば、この言葉は、民主主義の廃棄を意味する。だが、もちろん、文字どおりにとれば、この言葉はまた、どんな法律にも拘束されない一個人の独裁政治をも意味する。この独裁政治が専制政治とちがう点は、それが恒常的な国家制度と考えられずに、一時的な応急策と考えられていることである。

『プロレタリアートの独裁』したがって、一個人の独裁ではなく、一階級の独裁という表現からしても、マルクスが、この大きな実用主義とちがな真理

の場合に、文字とおりの意味での独裁を念頭においたのではないことを、示している。

マルクスがここで言っているのは、統治形態のことではなく、プロレタリアートが政治権力を獲得した場合には、どこでも、かならずおこるにちがいない状態のことである。マルクスがここで統治形態を念頭においていなかったことは、彼が、イギリスやアメリカでは、移行は、平和的に、したがって民主主義的な方法で実現されうる、という意見であったことで、すでに証明されている」(二〇ページ)。

われわれはこの論証を、わざと全文引用したが、それは「理論家」カウツキーがどういう手口をつかっているかを、読者がはっきり見ることができるようにするためであった。

カウツキーは、独裁という「言葉」の規定から出発するというやり方で問題に近づこうとした。

けっこうだ。どういうやり方で問題に近づこうと、それは、各人の勝手である。必要なことは、問題への真面目で、正直な近づき方と、不真面目な近づき方とを区別することだけである。問題にこういうやり方で近づく場合には、真面目な態度をとろうとおもうのは、「言葉」にたいする自分自身の規定をあたえねばなるまい。そうすれば、問題は、はっきり真正面から提起されるであろう。カウツキーは、そうはしていない。「文字とおりにとれば、独裁という言葉は、民主主義の廃棄を意味する」と、彼は書いている。

第一に、これは規定ではない。もし独裁の概念に規定をあたえることを避けるのがカウツキーには好都合なのだとすれば、なぜ問題にたいするこういう近づき方を選んだのか？

第二に、これは、あきらかに正しくない。自由主義者が「民主主義」一般を云々することは当然である。マルクス主義者は「どの階級のための？」と質問することをけっしてわすれないであろう。だれでも知っているように、――

「歴史家」カウツキーもやはり知っていることだが、——たとえば古代におこった奴隷の叛乱は、それどころか、激しい動揺でも、奴隷所有者の独裁としての古代国家の本質を一举に暴露したのである。この独裁は、奴隷所有者のあいだの、彼らのための民主主義を廃棄したであろうか？ そうでないことは周知のとおりである。

「マルクス主義者」カウツキーは、階級闘争を「わすれた」ので、途方もないたわごととうそを言ったのである。

カウツキーの自由主義的なごまかしの主張を、マルクス主義的な正しい主張に変えるためには、つぎのように言わなければならない、——独裁は、他の諸階級にたいしてこの独裁を実現している階級にとっては、かならずしも民主主義の廃棄を意味するものではない。しかしそれは、自分にたいしてか、あるいは自分の利益に反して、独裁が実現されている階級にとっては、かならず民主主義の廃棄（あるいは廃棄の一形態である、きわめて重大な制限）を意味する、と。

だが、この主張がどんなに真実であろうとも、これは独裁の規定をあたえるものではない。

カウツキーのつぎの文句を吟味してみよう。

……「だが、もちろん、文字どおりにとれば、この言葉はまた、どんな法律にも拘束されない一個人の独裁政治をも意味する」……

行きあたりばったりにあちらこちらを鼻でつつきまわる盲目の小犬のように、カウツキーは、はからずも、ここでひとつの正しい思想（すなわち、独裁は、どんな法律にも拘束されない権力である、という思想）につきあたったが、しかし独裁の規定はやはり、あたえてはいない。おまけに彼は、独裁が一人物の権力を意味するという、明らかな、歴

大きな実用主義とちっぽけな真理

史的なうそを言っている。これは文法上からいっても正しくない。なぜなら、ひとにぎりの人々も、寡頭制も、一階級等々も、独裁的に支配することができるからである。

さらにカウツキーは、独裁と専制政治との区別を指摘している。だが、彼の指摘はあきらかに正しくないけれども、われわれの関心をひいている問題とはまったく関係がないから、それにはふれないことにしよう。二十世紀から十八世紀に向きをかえ、十八世紀から古代へと向きをかえるカウツキーの性癖は周知のことである。だからわれわれは、独裁を獲得したあかつきにはドイツのプロレタリアートがこの性癖を考慮して、カウツキーを、たとえば古代史の中学教師に任命するだろうと信じる。専制政治についての空理・空論にふけてプロレタリアートの独裁の規定を避けることは、極端な愚鈍でなければまったくまずいペテンである。

要するに、独裁を論じにかかったカウツキーは、意識したうそをたくさんしゃべったが、なんの規定も与えなかったわけである！ 彼が自分の知力をあてにせず、自分の記憶によって、マルクスが独裁について述べているあらゆる場合を、「小箱」のなかから引き出せばよかつたらうに、そうすれば、彼はきつと、つぎのような規定か、あるいは本質的にそれに一致した規定をえたことであらう。すなわち、

独裁は、直接に暴力に立脚し、どんな法律にも拘束されない権力である。

プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの暴力によってたたかいたら維持される権力であり、どんな法律にも拘束されない権力である。

しかも、この単純な真理、あらゆる自覚した労働者にとっては（すべての国の社会帝国主義者のように、資本家に買収された小ブルジョア的ごろつきの上層にとってではなく、大衆の代表者にとっては）まったく明白なこの真理、

自分を解放するためにたたかっている被搾取者のあらゆる代表にとっては明らかこの真理、あらゆるマルクス主義者にとっては争う余地のないこの真理を、いとも博学的なカウツキー君「と、そのエビゴーン・日共指導層」から「戦つてとりもどさ」なければならぬのだ。このことは、なにによって説明すべきであろうか？ それは、ブルジョアジーに仕えるいやしむべきおべっかつつかいとなった第二インタナショナルの指導者ども「とその現代版エビゴーンども」にしみこんだ従僕根性によって、説明しなければならない。

まずはじめに、カウツキーはごまかしをして、独裁という言葉の文字どおりの意味「つまり、「一般的語感」は単独の独裁者を意味するという明らかなたわごとを述べ、つぎに——このごまかしをもとにして——つぎのように言明する。「だから」階級の独裁というマルクスの言葉は文字どおりの意味をもっていない（それは、独裁が革命的暴力を意味せずに、ブルジョア——これに注意——「民主主義」のもとで多数者を「平和的に」獲得することを意味するばあいの独裁「つまり、普通選挙権にもとづく議会制とか複数政党制などとりっぱに両立するディクタトゥーラ」という意味をもつ）と。

諸君、いいですか、「統治状態」と「統治形態」とは区別しなければならぬというのである。驚くほど深遠な区別ではないか。これは馬鹿げた議論をする人間の愚鈍の「状態」と、彼の愚鈍の「形態」とを区別するようなものである。

カウツキーには、独裁を「支配の状態」「そして日共指導層には、ディクタトゥーラを「政治支配」と解釈することが必要である。なぜなら、こうすると革命的暴力が消えてなくなり、暴力革命が消えてなくなるからである。「支配の状態」「そして「政治支配」とは、任意の多数者が……なにかあるものものと、……たとえば「民主主義」の

もとにある状態である。こういうペテン師的なトリックによって、革命がうまいぐあいに消えてなくなる！

だが、このペテンはお粗末すぎて、カウツキー「と日共指導層」を助けだしはしないであろう。独裁が、他の階級にたいする一階級の革命的暴力という、背教者にとって不愉快な状態を前提し意味するということ、これは「囊中の錐は、おのずから現われる」である。「状態」と「統治形態」とを区別するのがばかげていることが、明らかになる。統治形態「と政治支配」を云々することは、ここでは三重にばかげている。というのは、君主制と共和制とがちがった統治形態であることは、どんな子供でも知っているからである。カウツキー君には「そして、日共指導層諸君には」この両統治形態が、資本主義のもとでのすべての過渡的な「統治形態」と同じように、ブルジョア国家すなわちブルジョアジーの独裁の変種にすぎないことを証明してやる必要がある。

最後に、統治形態「そして、政治支配とか、国家権力とか」を云々することは、ここでは、統治形態ではなく、国家の形態または型を、このうえもなくはっきりと論じているマルクスを、ばかげた仕方で偽造することであるだけでなく、不器用に偽造することでもある。

プロレタリア革命は、ブルジョア国家機構を暴力的に破壊して、それを、エンゲルスの言葉では「もはや本来の意味の国家でない」新しい国家機構に代えることなしには、不可能である。

カウツキーには「そして、その現代的エビゴーンどもには」、すべてこうしたことをごまかして、うそをつくことが必要である、——彼の「そして、彼らの」背教者としての立場がそれを要求する。

独裁を規定するさい、カウツキー「と日共指導層」は、この概念の基本的特徴、すなわち革命的暴力を読者にかく

すことに、全力をつくした。だが、いま真理は明らかになった。すなわち、平和的変革と暴力的変革との対立が問題なのである。

ここに問題の眼目がある。すべての逃口上、詭弁、ペテン師的偽造がカウツキー「と日共指導層」に必要なのは、暴力革命を否認し、自分が暴力を否認していることをおおいかくすためであり、自由主義的労働者政治のがわへ、すなわちブルジョアジーのがわへ、自分が移っていることをおおいかくすためにほかならない。ここに問題の眼目がある。

要するに、カウツキー「と、その現代的エビゴーンである日共指導層」はプロレタリアートの独裁の概念を前代未聞のやり方でゆがめ、マルクス「とレーニン」を平凡な自由主義者に変えてしまった。すなわち、「純粹民主主義」についての俗悪な文句をしゃべり、ブルジョア民主主義の階級的内容を美化し、これをごまかし、被圧階級による革命的暴力をなによりも好まない、あの自由主義者の水準に、彼「と彼ら」自身ころがり落ちてしまった。カウツキー「と日共指導層」は、「プロレタリアートの革命的独裁」の概念を抑圧者にたいする被抑圧階級の革命的暴力が消えてなくなるように「解釈」することによって、マルクス「とレーニン」を自由主義的に歪めることで世界記録をやぶった。背教者ベルンシュタインは背教者カウツキー「と日共指導層」にくらべると、青二才であることがわかった（前出、二一四―二二二ページ、訳二四六―二五五ページ、傍点―レーニン、ゴシック体および「」内―山本）。

ごらんのように、『ディクタトゥラ』の本当の意味」とか「日本語の一般的語感」とかいった、小ブル的俗物特有の言い廻しをつかい、もっぱら小ブル的俗物の心情に訴えて、けんめいにその支持をかきあつめようとして、「プロレタリ

アートの独裁」の概念を「抑圧者にたいする被抑圧者の革命的暴力が消えてなくなるように『解釈』し」た俗物的偏見をばらまいているという点で、日共指導層は背教者カウツキーを上廻るものだということができる。

小ブル的俗物の本性は、「いわれのない攻撃」とか「多くの人たちに誤解をあたえる」とかいった「言いわけ」にも、よくあらわれている。仮借ない階級闘争をたたかい抜こうという者で、敵の攻撃をば「いわれがある」か「いわれがない」かで区別し、「いわれのない攻撃」だから「国民の皆さん、わたしたちが正しいのです。わたしたちの支持をおねがいします」と言って哀願してまわるような手合がどこにいようか？ つまり、これらの小ブル的俗物がやっているのは、仮借のない階級闘争どころではなく、「一票お願いします」という、平和的な投票獲得競争でしかないことがこれでよくわかるのである。そのうえ、「プロレタリアートの独裁は、まさしく暴力によってたたかいたら、暴力によって維持され、ブルジョアジーを暴力的に抑圧する無制限の権力である」ということは、レーニンがきっぱり指摘しているように、「まったく明白な真理」であり、したがって、この「真理」をもって反対派が「攻撃」の材料にするのは、まことに道理にかなった「いわれのある攻撃」といわなければならない。革命的マルクス主義者であるならば、このような「いわれのある攻撃」は、むしろ歓迎するところである。なぜならば、この攻撃は、プロレタリアートおよび広範な被抑圧大衆をして、真の「プロレタリアートの独裁」の本当の意味と内容についての正しい認識に近づけさせるからである。そして、そのような正しい認識を得させるべく、小ブル的俗物的偏見の払拭と真の革命的階級意識の把握をなしとげさせるために、粘りづよい献身的な闘争を不断におこなっている者だけが、本当のマルクス・レーニン主義者の名に値する。ところが、こうした真剣な闘争を意識的にさぼっている怠慢このうえもない背教者どもは、戦後数十年もたちながら、しかも、黨員数十万をかかえてありがたくも合法的活動のお恵みにあずかりながら、なおかつ「いま

だ革命的マルクス主義の理論に接していない人々がたくさんいる」のはなぜか？ ということについて真剣な反省などこれっぽっちもするでなく、まるで誰かほかの人たちのせいでもあるかのように述べたて、おのれの怠慢と俗物根性への拝跪を棚にあげて、その「たくさんの人たちが、誤解をあたえられている」と書きたてて平然としているのである！

いずれにせよ、「普通選挙権にもとづくブルジョア議会制度」とも「ブルジョア諸政党」とも仲良く共存することのできる「独裁」をまったく新規に「開発」したことにより、また、この「ブルジョア議会制度とブルジョア諸政党」と「平和共存」する「独裁」なるものを「執権」という新しい訳語で「新装売出し」をはじめたことによって、わが日共指導層は、歴代のあまたのマルクス主義改ざん者・背教者のなかで、おそらく、抜群の「最優秀賞」を授けられることは、まずまちがいないところである。

「資本主義社会から共産主義社会にいたるまでの過渡期全体を通じての、プロレタリアートの革命的独裁」、「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの暴力<sup>(3)</sup>によってたたくいとられ維持される権力、どんな法律にも拘束されない権力としてのプロレタリアートの革命的独裁」という、まったく明白な真理は、「ブルジョアジーをもふくめて国民の皆さんからもれなく一票を」という、小ブル的俗物びつたりの実用主義の前には、なんの値うちもみとめられない。現代修正主義の元祖・フルシチョフからマルクス・レーニン主義の斬新な修正・改ざんの手ほどきを受けた日共指導層は、「ちっばけな」真理をかなぎりすてて、いまや「政権」をめざしてブルジョアの実用主義の大道へ、つまり申し分のない背教者・裏切党の道に、公然と踏みいったのである。とはいえ、この実用主義の大道として、そうやすやすと「政権」へ通ずるものとはいいがたい。背教者は、まだ急進的小ブルジョアやインテリを釣るために「革命」とか「マルクス・レーニン主義」とかいうような「看板」を、つまり、さきの「ちっばけな」真理をおのずから想起させるような

「看板」をはずすわけにはいかない。しかし、いずれは巨大な実用主義がすべてを決定する。マルクス・エンゲルス・レーニンの文献から「独裁」の文字を抹殺することからすんで、「革命」を「革新」にぬりかえ、「マルクス・レーニン主義党」を民主主義と自由を守る党に、つまり「民主自由党」に名実ともに改称するのも、おそらく時間の問題であろう。このことはまた、本当のマルクス・レーニン主義とはなにか？ ということについて、先進的なプロレタリアートと勤労人民大衆の曇りない眼をひらかせ、さらに真実のマルクス・レーニン主義党の力強い成長をいじめるしく推進するという意味で、きわめて有意義なものというべきである。小ブル的俗物にとっての「大きな」実用主義は、かくして、最後には、革命的マルクス主義の「ちっぽけな」真理を輝かしく巨大なものとして、われわれの前に浮びあがらせるという、歴史的功績をはたさないではないであろう。

(3) 本論稿では、「暴力」という訳語を、一般的慣習にしたがってかりに採用しているが、わたしは、Gewalt, насильеは強力を訳すべきものと考え、従来から強力と訳出してきた。暴力団とか暴力行為とかいう言葉につながりやすく、乱暴な、無規律の、私利私慾のための暴力沙汰をあらわすものと受けとられやすく、そのかぎりできわめて不適当な訳、または誤訳というべきである。強力は、組織的な、規律ある、階級的自覚につらぬかれたもので、ふつうの暴力行為とは全くことなる。日共指導層は、あえてこの誤訳を採用しながら、その訳語が俗物にあたえる語感に自分もびっくり腰を抜かし、あわてて「独裁」そのものまでもぬりつぶしにかかったものである。こうした小ブル的俗物たちの心情をよくとらえることができるようにするために、本論稿では、わたしがかねてから排撃してきた訳語「暴力」をことさら採用したものである。